

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	江津湖舟游の記 : 文苑
Author(s)	黒本, 稼堂
Citation	龍南會雜誌, 29 : 54 - 55
Issue date	1894-10-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4439">http://hdl.handle.net/2298/4439</a>
Right	

郡人口三千五百餘、共爲後筑東部之都會、人戶櫛比、頗爲繁盛、又二里許、達山北村、山間之一小村耳、時已薄暮、而聞山路益難、遂投宿飯、黑而肴饌、幸有清泉、洗沐取涼、爲一快事、山中大苦蚊、

《未完》

## 江津湖舟游の記

助教授 黒本 稼堂

夏のはしめのうれの日午の後より、たのう學校の本科第二部のをしへ子ら、十五六人はろり、江津の水うみに舟逍遙を催し、豫科第一級のをしへ子らも、三四十人はかり、同じくろの邊ある、江津川のうれの家につとひす。たのれ第二部の方の人にさうはれて、ゆきけり。出水村より、舟よそひして下りけるに、またくまに舟はてぬ。いとあつかれば、やがて衣をぬぎて、萬頃の碧にあみし沖のかた、二三百間ばかり、たよぎつゝあがれば、杯かたふけんとして、まどぬせり。酒はたつさへこしありけり。一二杯ゝたみにのゝほしけるほど、いよいよ興うちろひぬれば、ひとりのをしへ子、今より舟くらべやせんといひ出てぬ。皆な興あることにこそとて、舟三艘うちあらへて、こぎゆく。ろの疾きこと、馬もてたふとも及ぶまじと見えたる、いはん方をえ。さてもその舟にあれざる、ゆくよとみれば、舟のあしえとろもとろにみなれ、棹のさす方には、心のこはやれど、舟したかはす。とやかくするうちに、はや舟より轉ひたちて、衣もはかまも、しどいにぬれて、溝いたちのごとあるもあり。しきりに仆ふれて、しりうたげするもあり。幸なる望、人々、しりうたげするもあり。しきりに仆ふれて、しりうたげするもあり。

よふばかりある。昔のなまがしが大聲にもまさりつへし。さるほどに、夕日もこがねの峰にてうかいやきつゝ、おちゆくめる。かの山のはにげてんどれもふもかひなし、ととに歸るまぎして、さかのばれば、第一級のをしへ子ども、猶をばしまに倚りて、これらのをまち顔なり。そのうちひとりふたりかちわたりきて、やよ人目をよきて通るとあ、こゝは税關のある所ぞ、あらためすばひとりもどほすまじとて、舟ひきよせたる中々れかし。舟よりのばれば、おのゝ杯もちきて、すゝつゝ飲みかはすほどに、いさよひの月も、松のぼしに尋ねきて、さよき流の夕波にすめる。うの涼しさ、今一入のながめなりければ、こゝにてこそは、例の一番をと望む。すきのかたあれば、いさやとて杯さしつゝ、汲むや心もいさぎよき、江津の川瀬のみあかみはと、所によせて、謠ひいづれば、皆人拍子とりて、うち興することかぎりなし。さてうこそをたち出て、出水神社にいたりて、築山の月のけしきなとうちあがめ、三々五々、聲はからかに、江津に水あみ、出水にすゝみとによびつゝ歸るも、心ありげにてゆかし、村を出つて、ばは、は、やからうたなと、うたふ聲の、ゆくての方にはのきこゆるもありし。

賞月感時事作 教授 笠間 梧園

船渡遠江洋

雷雨過時夕霏収。吟望此夜不堪秋。想看東水天相拍若無涯。扶筇唯看碧浪波。未信賴海一輪月。分照支那四百州。

翁詩膽大。纔過蒼海唱雲耶。

西征雜詠（其一）

崎陽客舍偶作